

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：22304

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010年度～2011年度

課題番号：22792241

研究課題名（和文）早産児の父親支援プログラム開発に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research for development of support programs for fathers of premature infants

研究代表者

樋貝 繁香（HIGAI SHIGEKA）

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・准教授

研究者番号：50362083

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、子どもの誕生後1週間での体験と子どもへの思いおよび看護師による介入がもたらした効果についてインタビューを通して質的に明らかにし、その結果から看護師が父親との関わりの中心となるものを見出すことであった。その結果、父親は【子どもが誕生したことによる安心】をしていた。一方で、早産で誕生した子どもの発達の予測ができず【発達の不確かさ】を感じ、父親は喜びと漠然とした将来への不安とが入り混じった状況であった。その中で、子どもと共に過ごす面会時間や妻の搾乳に同席し、子どもについて語り合う【親としての時間】を通し、親としての自覚をもつことで、家族の一員としての役割について考えていた。そのため、看護師は子どもの誕生後、早期より家族が親としての時間を通して、親としての自覚を高め、家族が発達していけるよう家族をシステムとして捉えた支援プログラムの構築の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The objectives of this study were to qualitatively determine, through interviews, the experiences and feelings of fathers of premature infants at 1 week after the birth of their children and the effect thereon of interventions by nurses, and to use the results thereof to identify key factors in the interactions between nurses and fathers. The results revealed that the fathers had “peace of mind from the birth of their children,” while having anxiety about “uncertainties in their children’s future development” as they could not predict the development of their prematurely born children, suggesting that they had mixed feelings of joy and vague anxiety for the future. They spent “time as a parent” visiting their babies at the hospital, staying with their wives during nursing, and talking with their wives about their children, thereby becoming aware of being a parent and their role as a family member. These results suggest that nurses should establish a family support program that recognizes each family as a system and encourages parents to spend time as a parent early after the birth of their children, thereby increasing their awareness as parents and enabling them to develop as a family.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：早産児，父親，看護支援，NICU

1. 研究開始当初の背景

近年、出生率が低下している一方で、生殖医療の進歩により低出生体重児の出生割合は増加傾向にあり、出生率の10%が低出生体重として出生した子どもたちである。予定の妊娠期間よりも早く出生することは、子どものみではなく、その両親にも多大な影響を与える。子どもの誕生は、夫婦という2者関係から3者関係となり、新しい家族関係が形成される段階であるが、近年では婚前妊娠も増えており早産で子どもが誕生する親たちは夫婦関係も確立しないまま家族機能を発達させていかねばならない状況にある。早産児の誕生後、親たちは想像していた子どもの誕生とは異なった状況下である上に、子どもの生命への危機に直面することもあり傷つき混乱した状況にある。またこの時期は、母親の体調や精神状態も安定せず、父親は母親の心身の状態を気遣いながら一人で親役割を担おうと努力する。そのような中で、子どもとの関係構築の支援は母親を中心として行われている。正期産で出生した親たちにおいても親となるための準備期間と支援が必要であることが明らかにされている。早産児の父親にとって妊娠期間の中断は、親としての準備を中断させられることでもあり、より一層親になることが大変な状況である。また、この時期は子どもの存在に対する不安を抱えながらも、父親としての役割を果たそうという責任感によって、子どもとの関わりを持ち始めるが、そのような中では役割葛藤を引き起こし精神的に不安定となることで子どもとの関係構築は行われにくくなる。そのため看護師は、父親が現状を受け止め対処する力を培えるような父親への関わりを行う必要がある。

国外では、早産児の父親が、子どもの状態の厳しさをどのように捉えているかでストレスを高く感じたり、父親は混乱した状況の

中スタッフとのコミュニケーションや情報提供などの支援の他に、NICUや仕事から離れた外部での活動が父親を支えたと報告されており、父親への具体的な支援につながるような早期の父親の体験をまとめている。しかし、国内の先行研究では、早期の父親の状況を捉え、父親への支援につながるような研究は少ない。そのため、傷つきを抱えたままの父親に対し、看護師たちは父親に子どもへの早期接触や子どもと母親の橋渡しなど、子どもと母親へのケアの対象者として一気に父親に役割を求め関わっている状況であると推察した。そこで、早産児の父親の状況を把握し、父親に向けた看護支援プログラムの開発が求められていると考えた。

2. 研究の目的

早産児の子どもをもつ父親が子どもの誕生後1週間での体験と子どもへの思いおよび看護師による介入がもたらした効果を明らかにする。また、国外における父親への支援の現状を視察し、国内における父親支援のあり方を考察し、父親と子どもとの関係構築が行えるための中心となる看護支援を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 対象

以下の条件を満たす早産児の父親とした。

- ①日本人のカップルである。
- ②生後1か月の時点で、子どもの状態が安定している。

(2) データ収集方法

対象の選定に際しては、周産期センターのスタッフの協力のもと上記の条件に合致する対象者を紹介していただき、研究への参加と面接の許可を得た。研究者が周産期センターの面談室にて面接を実施した。面接内容は、対象者の了承を得た上で録音し、逐語録に起

こした。また、面接時の印象や気づいたことを分析メモとしてノートに記載し、分析の信頼性、妥当性を高めた。

(3) 調査内容

- ①父親の年齢、職業
- ②子どもの出生までの経緯
 - ・妻の年齢
 - ・今回の妊娠で切迫早産の有無
 - ・子どもの在胎週数、出生体重
- ③結婚から今回の妊娠に至るまでの経緯
 - ・結婚から妊娠までの期間
- ④子どもが誕生してから現在までの体験
 - ・医療者からの説明や対応、子どもの治療や処置によって自分が体験したこと
 - ・妻の治療や処置によって自分が体験したこと
- ④子どもへの思い
 - ・子どもの出生から現在までの子どもへの思い
 - ・時間と共に変化したこと

(4) 分析

継続比較分析を行った。各対象者のデータおよび面接時に受けた印象などを記した記録を繰り返し読み、対象者の語った体験や状況をありのままにイメージできるように努めた。また、対象者の体験や心境に類似内容、相違内容を逐語録より抽出し、分類した。

(5) 倫理的配慮

研究対象者へは、①研究への参加は自由意思である ②匿名性の厳守 ③同意後の中止、中断は自由であり、それによる不利益がないこと ④本研究の目的以外での不使用を口頭及び文書にて伝えた。また、所属大学の倫理委員会にて審査を受けた。

4. 研究成果

(1) 早産児の子どもをもつ父親が子どもの誕生後1週間での体験と子どもへの思いおよび看護師による介入がもたらした効果

同意の得られた12名の父親からインタビューを行った。父親の平均年齢は35.25(±6.17)歳、会社員が11名(91.67%)、公務員が1名(8.33%)であった。12名全員が出産前は切迫早産や子宮内発育不全により妻が入院しており、そのまま出産に至っていた。子どもの在胎週数は、25週2日~31週5日であり、平均は28.68(±1.99)週であった。子どもの出生体重は最小551g、最大1606gであり、平均は1206.31(±338.69)g、超低出生体重児の父親が3名(25.0%)であった。また、インタビューを実施した日は子どもの平均日齢が28.25(1.54)日であった。面接を実施した現在まで、妻が里帰りをしてい

た人は8名(66.67%)であった。

早産児の父親にインタビューを行い、子どもの誕生後1週間での体験と子どもへの思いのデータを分析した結果、父親は、子どもの誕生に対し、生きて誕生したことを喜ぶと共に、入院していた妻の身体的負担が軽減されるため【子どもが誕生したことによる安心】をしていた。一方で、現在行われている治療や体重減少が、今後の発達へ影響を及ぼすか否かに加え、早産児の発達に関する情報不足より【発達の不確かさ】として、漠然とした将来への不安を感じていた。面会時、父親は子どもと共に過ごす【親としての時間】を通して、日々変化する子どもの動きや反応を看護師と共に確認することで、子どもの理解へと繋がっていた。また、妻の搾乳に同席し妻へのねぎらいや子どもへの思いを語り合うことで、【親としての時間】を楽しみ、家族としての実感を得ていた。

父親は、喜びと漠然とした将来への不安とが入り混じった状況の中、看護師からの説明を受け、子どもを理解することで[気になる体重の変化]や[新たな治療への不安]を解消していた。また、面会時間が自由であることにより[会いたいときに会える安心]しており、面会時に看護師と共に確認する子どもの動きや変化を通して子どもを理解してゆくため[小ささゆえの怖さ]を感じながらも、子どもへのタッチを喜んでいた。

(2) 国外における父親への支援の現状を視察し、国内における父親支援のあり方の考察

調査対象施設を含めた国内のNICUにおける家族看護の現状と看護師教育に関する聞き取り調査や文献検討から得られた結果と米国のChildren's Hospital Los Angeles NICUを視察した結果との比較を行った。その結果、双方ともにディベロップメンタルケアを中心に置き、子どもと家族への看護を行っていたが、米国では子どもの誕生後早期より、家族アセスメントを行い、家族単位での支援を検討していた。一方、国内では、子どもの誕生後の早い時期は、父親への支援、母親への支援など個々への支援を中心に行われている。そのため、今後は個別支援に加え、家族をシステムとして捉え、【親としての時間】を通して、家族としての発達を支援する必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

樋貝繁香、成田伸：超低出生体重児の父親が看護師に求める支援 -3名の父

親を対象に-, 栃木県母性衛生学会雑誌, 38, 5-10, 2012.

[学会発表] (計 1 件)

樋貝繁香, 成田伸: 超低出生体重児の父親が看護師に求める支援 -3名の父親を対象に-, 第36回栃木県母性衛生学会学術集会, 2011. 宇都宮市.

6. 研究組織

(1) 研究代表者 樋貝 繁香 (HIGAI SHIGEKA)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部・准教授

研究者番号: 50362083

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし